

平成6年1月11日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆう と 櫻貝 と
海光る わが 故里

第 6 9 号

内容	青い上っぱり	田中 まさ子
	芥川龍之介と鵠沼海岸	「鵠沼を語る会」
	村のくらし（その1）	有田 裕一
	村のくらし（その2）	佐藤 和子

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保2年・1801）で、“くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。

青い上っ張り

田 中 ま さ 子

私達は、その頃東京の芝に住んでいた。片門前町という。近くには芝公園、菊五郎の家、有名な芝増上寺、本当に都会の真ん中であった。それでも、幼い子供には、よい空気、日光、それに十分遊べる砂浜、海があったらと、いつも考えていた。たつた一人っ子なので、寂しい思いをさせたといつも悔いていた。それに病気がちであったし。

思いがけず湘南の海に住める幸せが来た。土地も家もないが、広い小松林の中の小さな貸別荘に住み、すべてが清らかな鵠沼の海は、毎日砂浜で走ったり、砂にいろいろな形のものを作ったりして、それは楽しく、子供も余り熱を出すこともなく丈夫になった。やがて学区制ということが出来て、東京には帰れなくなった。

藤沢第三国民学校へ一年生として入学した。子供は安田先生（鵠沼の土地の方）にお世話になった。泣き虫で一人っ子のため私の過保護が原因で、一人で学校へ行かなくて困った。その頃東京から体の弱い子を持つ家庭の人が、同じ貸別荘へ何人か来ておられた。毎日学校まで子供を連れてついて来る。農村の子供さん達とは、はっきり全てが違っていた。学校までついてくる父兄は、校庭の隅で一かたまりになって、わが子ばかり見ている。先生と話をする。農村の親御さんは面白くないのは当然だろう。子供のときから、親と家のために手伝いをするのは当たり前としているし、忙しくて子供にかまっていられない。鵠沼の母親達と農村の母親達が対立するのは、よく見る風景だった。その頃校長の坂倉先生は偉かった。まず、服装から改めようとのことであつたと思う。玉木さん、長谷川さんなど父兄会で「同じ服装にしては」と、安田先生に相談して、青い上っぱりを日本橋の高島屋で作らせた。それを着て毎日通った。みんな同じで、遠足にも式にも着てゆき、これはよかった。丈夫で型もよくみんな可愛いらしかった。

古い写真を見たら、葉山市長もこの青い上っぱりを着て、可愛らしく写真に写っていた。この上っぱりは戦争が始まる頃でお終いになったと思う。生地もなくなり、あれやこれやで出来なくなったのだと思うが。

この青い上っぱりはどこかの家で取ってあればいいが、ある筈はないと思う。半世紀前の思い出でになって仕舞った。鵠沼に住んだ人と農村の家との交流をよく果たしたが、食料事情が悪くなってからは、あまり上手くはいかなかった。 おわり。

芥川龍之介と鵠沼海岸

「鵠沼を考える会」

さる1992年は芥川龍之介の生誕100年に当たることが判明した。同時に彼の没年は昭和二年であるが、その前年の大正15年に鵠沼海岸の東屋に滞在したり、その貸別荘（イの14号）に親子四人で暮らした事実が判っている。さらに、彼の姪ごさんにあたる葛巻左登子さんが、いまなお鵠沼海岸にお住まいであって、当「語る会」の会員として会の当初から参加しておいでになる。そのご縁もあり、この年（1992）の秋に龍之介を偲ぶため、「ゆかり展」と名付けて、本会で記念展示会を、鵠沼公民館で企画実行した。

彼の鵠沼滞在期間は一年に満たない短いものであるが、夭折した天才文筆家で、その名声は、幾多の文学賞のあるなかで、ひときわ伝統のふるい「芥川賞」として新進作家の登竜門となった。そして、いまなお世の耳目を集めているほどである。彼の鵠沼での足跡は郷土史家にとって見逃すわけにはいかない。これが鵠沼公民館祭り・・昭和の末期から平成にかけて、このような文化祭が存在した・・に彼を偲んで「ゆかり展」と称した展示発表会を開催した理由である。以下その記録を本会の機関紙「鵠沼」に掲載しておく。

第1部. 「ゆかり展」の内容（別紙の写真参照）

第2部. 葛巻左登子さんと兄義敏氏のこと。

第3部 鵠沼における芥川の足跡とその文学地（別紙の綴じ込み参照）

↑ 趣旨

芥川龍之介は、その不滅の生涯の中で、鵠沼に来ていたのは、大正15年のわずか一年で、その間でも度々田端の家には帰っています。しかし、龍之介は生まれて以来、芥川家の養子となり、養父母、何人かの伯母などのもとで、窮屈な人間関係に悩まされ、世間の名声とは逆に家庭生活には恵まれず、神経を酷使してきた。鵠沼にきてはじめてその桎梏から逃れ、親子四人で「西洋皿一枚と缶詰の簡易生活」という水入らずの一家団欒を望んだという痕跡がある。妻文子の実家も鵠沼にあった。

いわゆる命の洗濯がしたかったに違いない。しかし、彼の運命は彼に幸いせず、胃腸障害やら不眠、神経衰弱、そのうえ痔を病み、ついには幻覚症状に陥り、阿片の助けをかりるまでに至り、健康の衰えに陥っていた。

天才といわれる鋭い感性と創作意欲は、この窮状にもめげず、鵠沼時代には、その作品十指におよび、鵠沼が舞台になったものは、「鵠沼雑記」「悠々荘」「齒車」「蜃気楼」と短編ながらこの地への愛着を表明している。われわれは寂しいくらい静かな当時の鵠沼で、死の恐怖と戦い、体調の衰微に煩悶しながら、望んで果たせなかった龍之介の心情に思いをはせ、鎮魂の意味も含めて、郷土史の一隅を飾ろうとするものである。

第 1 部

1. 「ゆかり展」の実施

期日 平成4年(1992)10月24日と25日

内容 家系図(別紙)、年表、ゆかりの写真、遺品など鵠沼での作品の抜粋

参観者 940人

殊に、ご存命の龍之介姪御にあたる「葛巻左登子」さんのご協力をいただき、叔父龍之介の現存する遺品、実兄葛巻義敏と龍之介との交流記録などの、世間に未発表の貴重な品々を展示品として提供を受けた。

2. 鵠沼に滞在中に書かれた作品

「點鬼簿」「玄鶴山房」「彼」「彼第2」「春の夜」「梅・馬・鶯」「O君の新秋」「三つのなぜ」である。

鵠沼における芥川の執筆活動は、当地で過ごしたのは一年にも満たないが、彼の短い一生の中ですら重大な時期の一つとなっている。自殺を動かぬこととして考えたのは鵠沼時代で、それは作品に色濃く投影されている。いずれも枚数の少ない断片的な作品や、緊張度の低いものだが、はかない死の影が現実感を漂わせている。

鵠沼は龍之介の『末期の眼』が捉えた重要な光景の一つとなった。

このうち鵠沼が舞台になった「鵠沼雑記」「悠々荘」「齒車」「蜃気楼」について、簡単に紹介すれば、

- (1) 鵠沼雑記は、遺稿。昭和六年七月、岩波書店刊の「文学的なあまりに文学的な」に収録されている。鵠沼滞在中の幻覚や予兆を『僕は』という第一人称で始まる十一の段章に綴ったもので、「東屋にゐるうち」「家を借りてから」の二つに分かれる。大正十五年に書かれた。
- (2) 悠々荘は、小説。昭和二年一月一日発行の「サンデー毎日」に発表。モデルとなったと思われる「楽々荘」という名前の別荘が鵠沼松が岡に実在した。
(文学地図・別添、参照) 荒廃した風景やしょう洒な廃屋の描写に、当時

の龍之介の心身の衰弱が、また、死を決意しながらも『しょう酒で悠々と』見えることを心した龍之介の姿を見ることができる。

- (3) 歯車は、小説。昭和二年十一月発行の「文芸春秋」に発表。六編からなっている。当時、龍之介の健康は衰え、家庭の煩雑さに憔悴し、加えて芸術的な悩みもあって神経は痛めつけられ『将来に対する唯ぼんやりした不安』（「或旧友へ送る手記」）から逃れられない状態にいた。

そういう中で最後まで、表現の方法を模索し続けた姿が刻みこまれている。

発表当時から評価が高く、龍之介の作品の中でも最高傑作とする人が多い。

作品の中の『僕』の家は鵠沼の二階家となっている。また、文中、(1)レインコート に葛巻左登子さんらしい人物が登場する。

この時の様子を、芥川文夫人は「追想 芥川龍之介」の中で”「文芸春秋」に掲載された遺稿〔歯車〕の中の (6)飛行機 の終わりの方は真実です。”と語り次のように詳しく説明しています。以下抜粋すると、

「歯車」(1)レインコート

自動車には丁度僕の他に或理髪店の主人も乗りあわせていた。彼はなつめのやうにまるまると肥った、短い顎髯の持ち主だった。僕は時間を気にしながら、時々彼と話をした。「妙なこともありますね。××さんの屋敷には昼間でも幽霊が出るって言うんですが。」「昼間でもね。」僕は冬の 当たった向うの松山を眺めながら、善い加減に を合わせてゐた。注・文中の理髪店は現存しとています。

「歯車」(6) 飛行機

僕は妻の実家へ行き、庭先の藤椅子に腰をおろした。庭の隅の金網の中には白いレグホン種の鶏が何羽も静かに歩いていた。それから又僕はだれにもわからない疑問を解かうとあせりながら、とにかく外見だけは冷やかに妻と母や弟と世間話をした。

- (4) 蜃気楼は、小説。昭和二年三月発行の「夫人公論」に発表。

「筋のない小説」の見事な実例といわれる。さりげなくちりばめている様々な素材が、短い作品の中でうまく作用している。平凡な事象や風景を描きながら、そのうちふと奇異や驚異を感じとっている。

それは、当時の龍之介の異常な神経のためであるけれども、読者に一種の実感をともなわせ独特の雰囲気を感じさせている。

名作との評価が高い。龍之介自身もこの作品に自信を持っていたことが彼の書簡集から知ることができる。

昭和2・2・12, 小穴隆一宛

『婦人公論のはしめじみ書いた。大兄や女房も登場させている。』

昭和2・2・27, 佐々木茂策宛

『婦人公論へ書いた十枚ばかりの小品、或は一読に堪ふるならん。』

昭和2・3・28, 齊藤茂吉宛

『唯 婦人公論の「蜃気楼」だけは多少の自信之有候』

昭和2・2・27, 滝井孝作宛

『「蜃気楼」が一番自信をもっている。』

なお、

この作品は鵠沼と特にかかわりが深い。ゆかりの言葉・地名が多い。

東屋、引地川、鵠沼海岸、江の島、松林、松風、砂浜、砂止め ……。

蜃気楼が鵠沼海岸で見えた……という事実！

龍之介が鵠沼に住んでいた大正十五年の秋、鵠沼海岸に蜃気楼が現れることが発見され話題となっていた。新聞にも報道され、龍之介も読み、体験し、作品のヒントにしたのだという。

<抜粋>

鵠沼の海岸に蜃気楼が見えることは誰でももう知ってゐるのであろう。

現に僕の家の中などは舟の映ったのを見、「この間の新聞に出てゐた写真とそっくりですよ。」などと感心してゐた。

〔参考文献〕

- | | |
|---------------|-------------|
| 「芥川龍之介辞典」 | 明治書院 |
| 「芥川龍之介文学読本」 | 吉田精一編 要書房 |
| 「芥川龍之介 叙情の美学」 | 平岡敏夫著 大修館書店 |
| 「芥川龍之介全集」第8巻 | 筑摩書房 |

＊なお、当会員の高木和男さん（鵠沼海岸1丁目在住）が、当時実際に海岸で見聞したことが新聞紙上に掲載されている。

第2部 葛巻左登子（龍之介の姪・現在鵜沼海岸在住）さんの手記

1. 叔父龍之介の思いで。

「私の生まれた明治43年11月、ちょうど芥川家も家を新築するために田端から新宿の耕牧舎脇の家に転居していました。ですから私は「一高生の龍叔父」が使っていた勉強部屋の階下の座敷で生まれました。

父が「是非、龍ちゃんに名付親になってほしい」と頼み、『さとこ』（龍之介は里子、後に父が左登子と）という名前が誕生しました。

戸籍上、昭和5年まで「妹」だったこともあり終生“龍兄さん”で通してしまいました。

叔父自身が生後まもなく芥川家の養子になり両親にそだてられなかったように、私達兄妹も実父母には育てられず、その点でも叔父には「ひと味違った想い」もあったようです。“龍兄さん”の言葉として、心に沁みて残っているのは、

—— 優しい人間であれ・女史にはなるなよ —— の言葉です。

芥川叔父が没しましたとき、兄義敏は17才、私は16才でした。

2. 兄のことに就いて。付・芥川龍之介の終焉のこと。（別紙）

この文章は、“ゆかり展”の際に、参観者にお配りした文書を綴じ込みました。

3. 略歴及び年譜

明治43年11月26日	父義定 母ヒサの長女として誕生。両親の離婚後に生まれ、出生届の数日後、母方の祖父新原敏三夫婦の養女として入籍。
大正12年	府立第六高女に入学。
大正12年9月	関東大震災にて焼け出され、新原家ともに田端に転居。
昭和2年	転校した大妻女学校を卒業。 母の再婚の夫・西川豊 死去。
昭和3年	初めて北海道の実父宅に赴く。
昭和5年	葛巻姓に復籍。
昭和12年	父義定 事故死する。
昭和25年	家屋整理の上、上京する。
昭和29年	鵜沼引地川辺りに転居。30年に現住所（鵜沼海岸）に移転。
昭和31年	母ヒサ 死去。
昭和43年	兄義敏 同居。
昭和60年12月	兄義敏 死去。

4. 葛巻義敏氏の略歴

明治42年8月5日～昭和60年12月16日。

評論家。父葛巻義定 母ヒサ（芥川龍之介の姉）の長男として母方の祖父経営、耕牧舎新宿牧場にてうまれる。

翌、数え年二才の頃、両親の離婚により、母方祖父芝区新銭座新原敏三（耕牧舎本店）にて育てられる。

大正11年東京高等師範付属中学校入学。夏の林間学校にて肺炎にかかり、病後芝銭座の新原宅からの通学が困難のため一時芥川宅から通学したが半月後新原宅に帰る大正12年1月家出。銀座の出版社「北隆館」の小僧になる。

この間、武者小路実篤の「美しき村」に入村を希望し、父義定（北海道在住）の承認を得るため北海道に行く（満14歳）が関東大震災が起こり、また伯母フキの引き止めもあり断念、実篤のすすめもあって芥川家に同居。叔父龍之介より教育を受ける。龍之介は弟のように可愛がり、松屋の原稿用紙を買いにゆかせたり、使い走りなどを頼んでいた。（書簡集参照）

そのうち 叔父龍之介は義敏と二人だけで全人誌「一束の花」（大正13年）を作ったり、家庭内の複雑な事情に耐えかねて「義敏を伴れて家出せむ」ということもあった。心身ともに疲れ果てていく叔父龍之介を近くに見、義敏は家族全員のためなんとかして最悪の状態だけは避けねばと苦心していた。

昭和15年9月 結婚。

昭和19年5月 東京田端より疎開、鶴沼に転居

昭和45年4月 鶴沼の葛巻左登子宅に転居

昭和60年12月16日 急性心不全にて死去

堀辰雄・中野重治らの同人誌『驢馬』第11号より同人になって『僕の憂鬱』を発表、堀風な叙情的作品である。また、アテネフランセで坂口安吾を知り、雑誌『言葉』その後継誌『青い鳥』を出す。芥川没後、原稿、資料の保存と整理に尽くし、昭和2年12月から刊行された『芥川龍之介全集』（岩波書店）の編集に従事。日本文学アルバム6『芥川龍之介』（筑摩書房昭和29年）、資料原稿を整理した『私のノート 椒図志異』（ひまわり社、昭和30年）、共編近代作家研究アルバム6『芥川龍之介』（筑摩書房 昭和39年）、『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店 昭和43年）『芥川龍之介 未定稿 デッサン集』（雪華社 昭和46年）などを編集発行したなお、作品とのかかわりについては『晩春売文日記』に名がみえる。

5. 叔父龍之介からの義敏への書簡

✧ この中にお金十圓ありこれにてルナルの「葡萄園の何とか」と原稿用紙十とちとを買い、餘りたるお金にて足りない畫の具を買うべし筆も入れれば買てもよし

エライ叔父

二十三日朝

バカ甥さま

(大正13)

✧ 原稿用紙至急送られたし。「竹の里歌」(小さい本カミトヂ)パピニのA Finished Man (コレハ杉戸ノアル書棚ノ下カラ二番目ニアル。エビ茶ノ大キイ本、パピニはPapiniナリ。)コノ二冊モ至急送ラレタシ。ソノ二ツヲ送ッテ貰エバアトハ用ナシ 電車ニヒカレテ死ンデモヨシ。

十三日

龍

✧ コノ画ハガキハオ前ニヤルノ故一番イヤナノヲ選ンダト知ルベシ。温泉ハハイッター一日二日ハ興奮シテ夜ネラレナイ 三日位カラ湯ヅカレガ出テヘタヘタニナル又ソノ興奮トヘタヘタトノ中間イル ツマリヘタ奮ダネ モウ本ヲ四冊ヨンデシマッタ 何モヨムモノガナクテ弱ツテイル

二伸 お前の寫した芭蕉の行状も送ってくれ 二階にあったと思う。いろいろしたい事が出来た。

(大正十四年)

修善寺より

✧ もう一枚このゑはがきをやる。中々好い橋だろう。A man finishedはA finished manに同じ。それだから英語を知らんもは困る。竹の里の歌はなければやむを得ない。茶色の表紙の本だ。但し十年も前に持ってゐたものだからないかもしれない。選歌では困るがいやいやながら間にあわせてやる。よまないところから手紙を北海道へ出して送金をさしとめるゾヨ

十六日朝

龍

✱ 本も紙もまだつかないぞ。困る。義敏公の公は熊公八公の公の字なり。

(大正十四年) 修善寺より

✱ 又好い画はがきをやるから感謝すべし。明日出発、大磯と鎌倉とにより、ゆるりと帰京。早くば五月十日頃、遅くば来年になるかも知れず。むやみに原稿ばかり書いたせいか、右の目がへんになった。或いは蜂蜜のなめすぎかもしれない。をばさんやおばあさんに折角来いと言っても来ないで思い知れと言ってくれ。おみやげなどは汚れたシャツや猿またの外に何も持って行かない。

五月二日 龍之助さまより

✱ [修善寺駐車場の寫眞に]

コノ地面雨ガフルトブクブクナリ。コレハウチノオバアサンガ犬ヲカラカッテイル所。虫メガネデ見ルベシ。コノ中ニ轢死人ノシガイアリ。葛巻義敏トイウナノヨシ コレハオバサンノ頭ダケ出シトコロナリ虫メガネデゴラン。ヨク似テキル

(大正十四年)

✱ よつちゃん大王閣下

「戦争と平和」の上巻を出しておいて下され給へ 願い奉る

(大正十五年)

✱ バスケットの中の原稿、

風呂敷に包んだ原稿、

鼠色の舊小説、金元明の部(コレハ義チヤンニ見テ貰イタシ)

(昭和元年)

鶴沼より

✱ 封筒を一束買わせにやつてくれ。

注 五十束でもいいよ

龍殿さま

義べい殿

(昭和元年)

6. 叔父・芥川龍之介のこと

葛巻義敏 記

私が叔父と一しょに暮らしたのは、大正12、13、14、15、昭和2年の五年間だった。それは現在の年齢になおして、満13歳2ヶ月から、17歳11ヶ月までだった。

不思議なことに私の祖父も、叔父も、それに私を含めて、皆、その両親たちと縁が薄かった。祖父は、山口県のある庄屋の長男に生まれたが、その12歳の時父を失い、母は他家に去っていたので、いろいろの境遇を経て、明治のはじめに東京へ出てきて、後に、渋沢栄一、益田孝、三井八郎衛門等の協同出資になる牛乳屋をやり（大正になってからであるが）それらを皆済まして、新宿に七千坪の牧場を持ち、数カ所の支店を現在の都内に持ち、小さな事業家の一人になっていた。

叔父のことは・・・記すまでもあるまい。

私も生まれると間もなく、父母に別れたので、この母方の祖父に満8歳6ヶ月まで育てられた。小学校2年の終わり近くまでである。この祖父の死後、独身で叔父を育ててきた養家の大伯母（祖母の直姉）に半ば育てられ、最後に、叔父や大伯母と一しょに暮らすようになったのは、大正12年、叔父31歳の時、私13歳と2ヶ月の時からである。

私は語学を除いて（中学は教育大付属に試験を受け、三年まで通った）すべての教育を、その死の前夜まで、叔父から受けた。少し早熟なところがあって小説類読み齧るくせがあったせいかも知れないが、彼は13歳の私に漱石全集は「文学論」と書簡集を除く全部、鷗外全集の翻訳類はほとんど全部、子規全集、左千夫歌集などを日課のようにして、読ませた。朝の九時ごろから夕方の六時近くまで、彼の二階書斎の隣室に、正座し、机に向かって読む習慣を付けられた。また、したがって、一日のうちに、何度となく叔父との接触を持った。彼は隣室で原稿を書いている。自然その原稿の切り張り、部分的な清書、一部の整理のほか、いろいろな雑用も足した。この話をすると、たいていの人には、我々をいわゆる叔父、甥の関係と見るらしい。しかし、これは必要以上の冗談口もきき合ったり、遠慮ない態度で接しあったりした。彼がそうした人間であったのと、前に書いたように、私のやや早熟さが自然とこういう自由な態度を、叔父甥ではなく、お互いに取りさせたかも知れない。同

じ年の秋には（その時、私はもう満で十四歳になっていた）ふたりきりの回覧誌「一束の花」というものを作るようになっていた。叔父は丹波熊太郎の名で「桂義輔に献ず」として「皇帝と皇子」五幕を書いてくれたり詩「ひとりあるもののうたえる」や「商賈聖母」等の原稿を呉れた。その上、蔵六の印をあしらって「一束之花」字や、艸のような墨絵で装幀して呉れたりした。しかし、それもいまから考えれば彼の破屑原稿をもらっては、その裏に何かを書きはじめかけた私の書いたものをごく自然に見させるための手段であつたらしい。それにしても、少し早過る（早熟とはいえ）教育のような気もする。が、彼と一しょに暮らす前には、自分よりも五っくらい年上の文学青年数人をしか友だちに持たず、そこから自然彼とは反対の方向（と見られていた）「白樺」派にしか接しない、武者小路さんに師事していた私の存在は、彼にはちょっと意外だったかもしれない。・・・しかし、私はあえてこれを書く。この私のための「教育」、私の一生を通じて大変に役立ったばかりではなく、かくれていた彼の何かを、明らかにする上でも彼には彼なりの役立ちをしなかったか？と。・・・人を教えることは、教わる者よりも、教える方により真面目さを必要とするのではなからうか。

もっと、幼年時代のことを書いてみよう。この文庫の一冊で、星野立子さんが鎌倉の菅先生や菅忠雄さん時代の彼（昔、鎌倉の海浜ホテル前の野間という西洋洗濯屋に間借りしていた時代の彼、結婚して大町辻の小山という広い別荘内の蓮池に臨み、大きな芭蕉の葉がすぐ庭先きに広がっていた斜面のかげの小さい一軒を借りていた時代の彼）のことを書いていられる。これはたしか夏だったと思う。その野間洗濯屋の奥座敷に、店の横から路地を通っていく片側が低い石垣で築いてあり、一度、その積んだ石と石の間を出入りする小さな蟹を捕えて遊ばせてくれた彼のことを、私はなぜかいまもはっきりと思いだす。しかし、それは不思議なことに、小さい子どもが何をしたらよろこぶかを知らないため、考えたすえ彼の思い付いた遊ばせであったようにも、私はその時のことを覚えている。子供心にも強いてそのよろこぶ様子を見せなければいけない気がしたのを、どこか薄暗い、侘しさに覚えている。子どもよりも仕舞いには彼の方が夢中になって、子どもの私はつまらないのだった。それよりも（結婚して）翌年夏、久米（正雄）さんも駅前の下宿にいて、この家から一本道の街中を通して由井ヶ浜海岸まで、毎日泳ぎに通った時の気持ちの方を遙かに明るいものとして思い出している。海にはいると、彼でも久米さんでも無理に手をとって、深みの方に連れていこうとするのだ。その嫌がる叫び声を聞きつけては、いつも助けに来てくれるのは菅さんの忠雄さんで、曲がりなりにも水に

浮かぶことを教えてくれたのも、また菅さんだった。

これはそれからずっと後にも、どこで会っても、その菅さんのどちらかと言うと蒼く澄んだ目付きやその顔を見るごとに、なぜかなつかしい気持ちで対さずにはいられなかったのはお互いにこの時代につながる思いでがあったからだろう。

そうして、叔父との生活は大正12、13、14、15、昭和2年とすすみ、最初には思いもかけなかったような新しい関係が、私たちの間には展げてきてしまったのだった。もともとエリートだけでしかないような叔父をある時期、私は非常にきらっていた。彼は親戚中でのほめ者でもあったし、その有名人であることにも、親戚中での「模範」であることにも、私はひどい反発を感じるがあった。ましてや、それに悠々としてのっているかに思われる時があった。・・・私の中学七年制の学校をどうしてもやめ、変名で家出し、なに不自由ないにもかかわらず、祖父はすでに死んでいたが、「搜索認人」として取りおさえられるまで、年少労働者の群れへとびこんだのも、こうした周囲と彼への反抗心でしかなかった。（いうまでもなく、それがどれほどつづいたにせよ、今日の私はその無軌道ぶりを否定する・・・ただその二階の合宿所から見えた、向かいの瓦屋根には、数日来の雪がまだ消えのこり凍てついていた）

それから引きとられて、「本式」な彼の教育がはじまったのである。それは最初多少堪えがたいほどにきびしいものであった。しかし、私は想うのであるが、教える方といえ、教えられる方といえ、如何ほど常談ぐちをたたき合いながらも、そのさりげない毎日のうちに、愛情こめた、食うか食われるかの、はげしいぶつかり合いでしかなかりうかと。その意味では、彼は天成の「教師」以外のなにものでもなかった。適量にきびしくもあり、適量な甘やかし方も知り、また、適当な順序と方法を知っている教師でしかなかった。私はそれによって、どれほど益されたかもしれない。しかし、それ以上の、なにものを私という一個の人間のうちに引き出したのか知らない。（それは、おそらく私自身すらも、全然知らなかった私でしかなかりう）私は辛うじて、及第したにしかすぎない。それが、いつもこの常談ぐちをたたきながら、さり気ないふうをしながらも、おとなも及ばない彼との「会話」を私にさせた原因でしかなかりうかと思うのである。（これから「何月何日、彼の自殺の決意」とか、その他の彼の晩年にあらわれる諸登場人物の名を明らかにすることも一見、容易にみえるのである。しかし、それらは全部「嘘」でしかない。）

ただ、私が求めたのでなく、彼自身の語った、これらの「会話」から、彼のはっきりといいうることのみを言うならば、彼はその晩年の遺稿作品の中でさえ真実だ

けを語っているのではない。それらはいつの場合にもしろ、これらの「会話」と同様に、ないまぜにしかっていないのである。また結果的には、そのさいご近くでは彼自身の書くとおりの、「死と遊んで」いたにしかすぎない。が、人々はその源をみようとはしない。各瞬間ごとに、もう一度、新しく立派に生きようとした彼自身の姿を。・・・そして、彼がのこしてくれた最大の教訓「いつの瞬間にも、己れ自身だけはおのれ自らであざむくまいと努力すること。（それとても、各自の可能性は、在るかも知れない）・・・しかし、それはいつか救われる。」（これとても格別のことではあるまい。人々はおのれ自らを、おのれのうちであざむいていないのが、人間の実態ではあるまいか。・・・今日の私は、そのように信じる）

おわり

〔注〕

昭和四十二年五月二十日初版発行の「旺文社文庫（芥川龍之介著、舞踏会）」より抜粋す。1989・9月

妹 葛巻左登子記

参考文献

芥川龍之介全集 第11巻 書簡二 （岩波書店）

芥川龍之介事典

文芸春秋 昭和10年10月号 「芥川龍之介の憶い出」 富士 山著

なお、「鵠沼を語る会」の会誌「鵠沼」に、掲載された芥川龍之介関係の記事

は、 第5号 芥川文学と鵠沼（昭和54・7・20） 伊藤 昌

第11号 芥川文学考証とカルテ（昭和56・1・15） 富士 山

第15号 芥川龍之介晩年の消息（昭和58・7・12） 富士 山

第19号 龍之介の住んだ二階建の家について

（昭和59・3・13） 富士 山

第23号 芥川龍之介晩年の消息・補記（昭和59・11・13） 富士 山

第27号 芥川龍之介の「月光の女」について

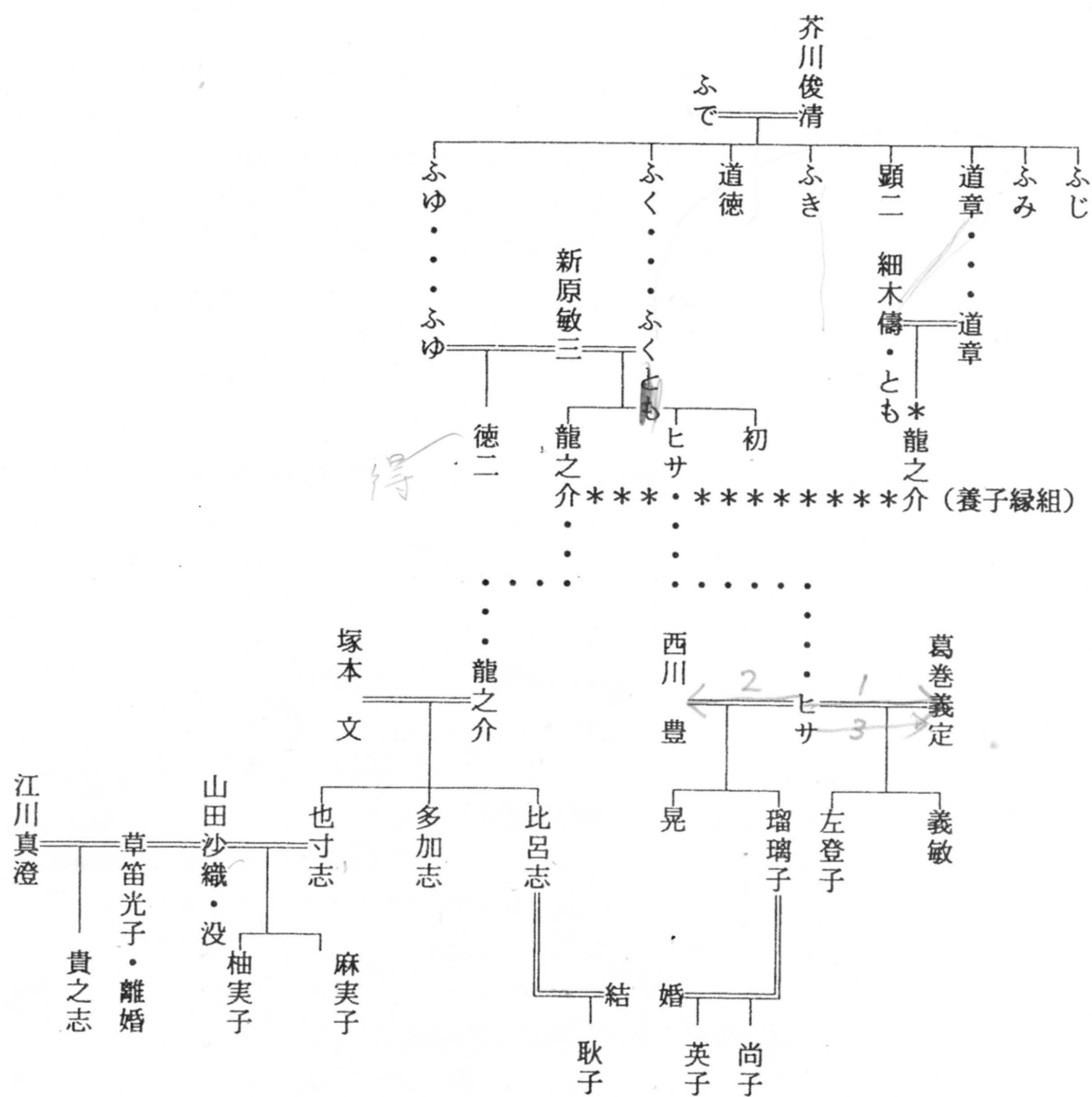
（昭和60・7・9） 葛巻 左登子

第58号 鵠沼の湘南学園について・遺稿（平成3・3・5） 富士 山

第69号 芥川龍之介と鵠沼海岸（平成6・1・11） 鵠沼を語る会

鵠沼の芥川龍之介（昭和58年、新潟県庁OBだより） 伊藤 節堂（会員）

芥川龍之介の家系図



兄のことに就いて

付・芥川龍之介の終焉のこと

葛 卷 左登子

私の兄葛巻義敏は、明治42年8月25日に、父葛巻義定、母ヒサの長男として、母方の祖父新原敏三の経営する耕牧舎新宿牧場で生まれた。そして数え2歳の時に、母の我儘から両親は離婚してしまったのだった。その際、離婚の条件として、父義定は軍籍にもあり、また母方よりの申出もあったりして「義敏は、10歳までは母方の祖父が養育し、満10歳に達した時、父方で引き取ること」と決定して、年子で生まれた私は、祖父の養女となったので、兄妹ともども芝区新銭座町の新原家で育てられた。尤も私は、満5歳近くまでは他家に預けられていたので、実際は兄の6歳の秋から一緒に暮らしたのであって、兄はむしろ叔父の新原得二と兄弟のようにして育てられたのらしい。

それで、義敏の満10歳に達した日——当時父の義定は「シベリヤ出兵事件」に就いて満州に駐留しており、代理人として父方の従兄弟の二人が、「義敏を引取りに新原家に赴いた」けれど、祖父の敏三は既にその五ヵ月前に病没しており、祖母ふゆ（実祖母の妹）は、義敏をその幼児より手塩にかけて育ててきたので、何としても手離し難く、結局、”誰が何んと言おうとも、私の瞳の黒い間は、誰にも決して渡しませんから云々”と強引に横車を押し通してしまい、引取りに行った従兄弟たちは止むを得ず引き下がりて帰宅したとのことながら、余程驚いたらしく、その時の祖母の様子を後々まで私は度々聞かされたのだった。そのような次第で、祖父母の没後も叔父の新原得二夫婦と私達兄妹は、一緒に暮らした。そして、大正11年春、兄義敏は隣地の神明小学校を卒業して大塚の高師付属中・・・現教育大付属中（当時七年制中学）に入学した。兄は小学校低学年頃までは、私ともども、芥川宅を我が家同然にして過ごしていたけれども、芥川叔父が所謂新進作家として世間にもてはやされるに従い、或る種の反撥を感じ出したらしく、もう「芥川宅」に行かず、小学五、六年生頃よりは、単独で武者小路先生の「日曜の集い」に行くようになり、後には自分よりずっと年長の友人を誘って連れ立って出掛けるようになってしまったのだった。そして、付属中一年の夏、林間学校で友達の見病していて、「クルップ性肺炎」に感染し、大伯母（芥川ふき）の心痛のために、一時芥川宅より通学するも、二学期の半頃には回復して新原宅に戻り、往復二時間の通学を続けていたのだった。そしてその年の歳末に、芥川大伯父（道章）の不用意な一言が刺激となって翌12年1月4日、義敏は秘かに家出をして、銀座の出版社「北隆館」の”小僧さん”になってしまった。その大伯父は、祖父敏三の没後は新原家の家政管理に終生携わっていたのだった。

義敏は、それから芥川、新原両叔父の心痛により半月後には発見されて、その後は芥川宅や西川宅——母の再婚先——に住むも、武者小路先生の「新しき村」に入村の希望が強く、大正12年8月末（満14歳）に、実父の承認を貰いに初めて北海道に行ったのだった。そして、そのことで父と交渉中、関東大震災が起こり、新原宅、西川宅は全焼し、義敏は9月中旬にようやく芥川宅に帰着して、数日後「義敏を受入れの為に上京された武者小路先生にお目にかかった」が、九州行（当時の「新しき村」）には、叔父を育てた大伯母が大反対にて、困り果てた義敏は、初めて自分の周囲の事情をくわしく申し上げて、先生より「芥川君が叔父さんならば君、今後は万事芥川君に教えて貰いなさい」というお言葉にて、帰宅した義敏はそれを叔父に伝えその翌日から、芥川叔父独特の厳しい教育が始まったのだった。そのことに就いては後年、義敏自身が「旺文社文庫」の『舞踏会』に記しているので詳細ははぶくも、その「教育」の傍ら大正13年には、叔父は義敏と二人だけの同人誌「一束の花」を作ったりまた14年頃になると叔父は、その家庭内の複雑さに耐え兼ねて幾度か「義敏を伴れて家出せむ」という事件も起こしたりして、その晩年に近付くにつれて心情的には階下の家族達とは別々の日々になってしまった。そして大正15年5月、鵠沼海岸にて妻、文との新しい家庭生活を試みるも、それも結局は思案倒れとなってしまい、昭和2年に入っては、またまた、心身ともに疲労する事件のみ起こり、疲れ果てた叔父には最後の刻が近付

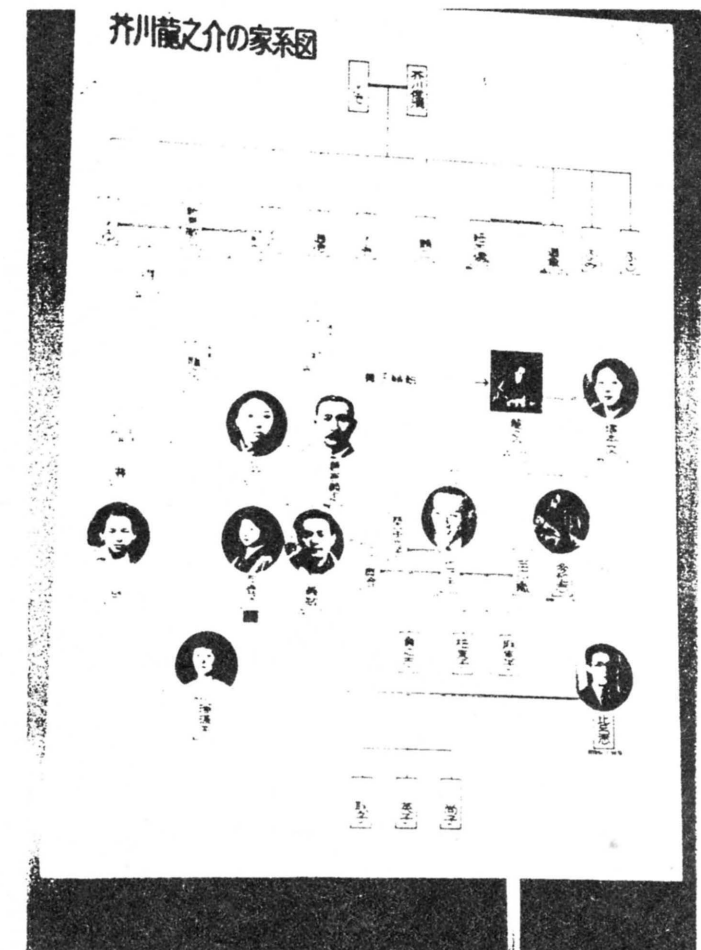
き、義敏は義敏でまた、全家族の為にも、何とかして最悪の状態だけは避けなければと苦心する日々だった。そして昭和2年7月22日、昼間から訪れていた小穴画伯が夕暮に”もう僕にも駄目だ”と言って帰ってしまわれた。後、義敏が階下に行こうして、階段を降りかけたところ”オ前まで行ってしまふのか”と声がかゝり、義敏は直ぐ引き返して叔父の書斎に入り、何や彼やと雑談をしていたら叔父は「今夜死ぬ積りでいたけれど、お前と話をしていたら、その気が無くなってしまった」と言って深夜、二人で階下の厠に行き”お寝み”の言葉を交わして各々の寝所に別れた由。そしてその翌日の23日は、叔父は最後の作品の「続西方の人」を終日かゝって執筆していたらしく、夜になって書き終えた叔父が書斎の向う側の義敏の部屋に顔を出して、”原稿にノンブルを打つのでオ前の「B2」を貸して呉れないか”と言うので——当時義敏は画を描いていて軟らかいB2の鉛筆を持っていたので——それを持って書斎に入り、義敏は昨夜の様にまた話している内に叔父の気分を更えてしまおうと雑談していたところ、深夜になって、裏階段をミシミシさせて上がってきた伯母（ふき）が、部屋に入ってくるなり”竜ちゃんはこの頃、死ぬの何のと言って計りいて、私は竜ちゃん独りを便りにして生きてきたのに云々”と泣き出し、叔父は”そんなコトしないから大丈夫だよ”と伯母を慰めていた由。——が、竜叔父が「死ぬ、々々々」を言い出したのは昨日今日のことで無し、事実家の内で竜之介一人を頼りにして生きて来た伯母（当時72歳）の愚痴もまた無理からずで、同時にコノ伯母の神経もまた鋭敏にて、義敏も最初はこの大伯母の相手をしていたものの、いつ果てるとも無いその愚痴に疲れて自分の部屋に退つてしまった由。ふき伯母の繰り言はそれからもエンエンと続き、若かった義敏は、「多分今夜は大丈夫だろう」と思って床に就いてしまい、翌24日早朝叔母文に”到当やってしまったわよ”と起こされるまで眠り込んでしまったという。そして、翌日分ったことは恐らく24日の未明、すでに寢床に入っていたふき伯母を起こして”明日朝、コレを下島先生に渡して下さい”と言って「水涕や——」の短尺を叔父が託したコトだった。そして義敏もまた、叔母文に起こされて自分の部屋を出ようとして、叔父の書斎との間の廊下に埋高く積まれた叔父の中学時代からのノート、その他に気付いた。

——その瞬間、三日前に叔母、文が秘そかに開封してしまつた——文宛の遺書——の第三項に「文子ハ義敏ノ生活ヲ三年間以上保証スル義務ヲ有ス。何ントナレバ、余ハ葛巻義敏ヲ最モ愛スレバナリ」とあるのに思い当たり「叔父の遺志」を深く心に刻んだのだつた。（コノ遺書ハ未発表モノ）

猶、24日朝、知らせで駆けつけて来て下さつた室生先生が、二階の自室の義敏の顔を見るなり、突然、幼児のように手放して、大声を挙げて泣き出してしまわれたという話は、当時の総てのコトを表現して余り有ることではなからうか。また、久米サンからも「いろいろと不満のコトも有ろうが、この際は老人達のために、何にも彼も我慢して欲しい」と言われ、義敏は24日午前より、27日の出棺まで自室にこもり限りで、他の誰方にも会わずに終わったのであった。

そして叔父の死後、三人の老人を含む芥川遺族のために、兄は全集はじめその他の出版に携わり昭和12年までに老人達を見送り、其後の芥川宅の諸々の雑事も片付け、15年には義敏自身も結婚したものの、芥川叔母からは依然として世帯の相談にて、戦後の苦境を経て、両家が完全に別々になったのは、叔父没後30年の後のことだつた。そして、兄の結婚も余り順調ナラズで、永年、心がかりの「未定稿集」も着手から十年の歳月を閲して、昭和43年3月に、ようよう「第一輯」を出版したのだつた。実は、兄は幼少より「絵」に興味を持ち、小学校六年生の頃、自宅近くの「ガード下」を描いた板画が、日比谷の松本楼に飾られたり、またその後芥川叔父と暮しつゝも小穴画伯に洋画を教えてもらつたりして、大正14年頃には、「アデネ・フランセ」で”ブルベ”——「仏政府給費生」の特典も得て、叔父を悦ばせてもいたけれど、結局は実現を見ないで終わってしまい、返す々々も残念なこと乍ら、「人生」とは、真にそのようなモノなのかも知れないと思う今日この頃でもある。

1992・10・4日 記。

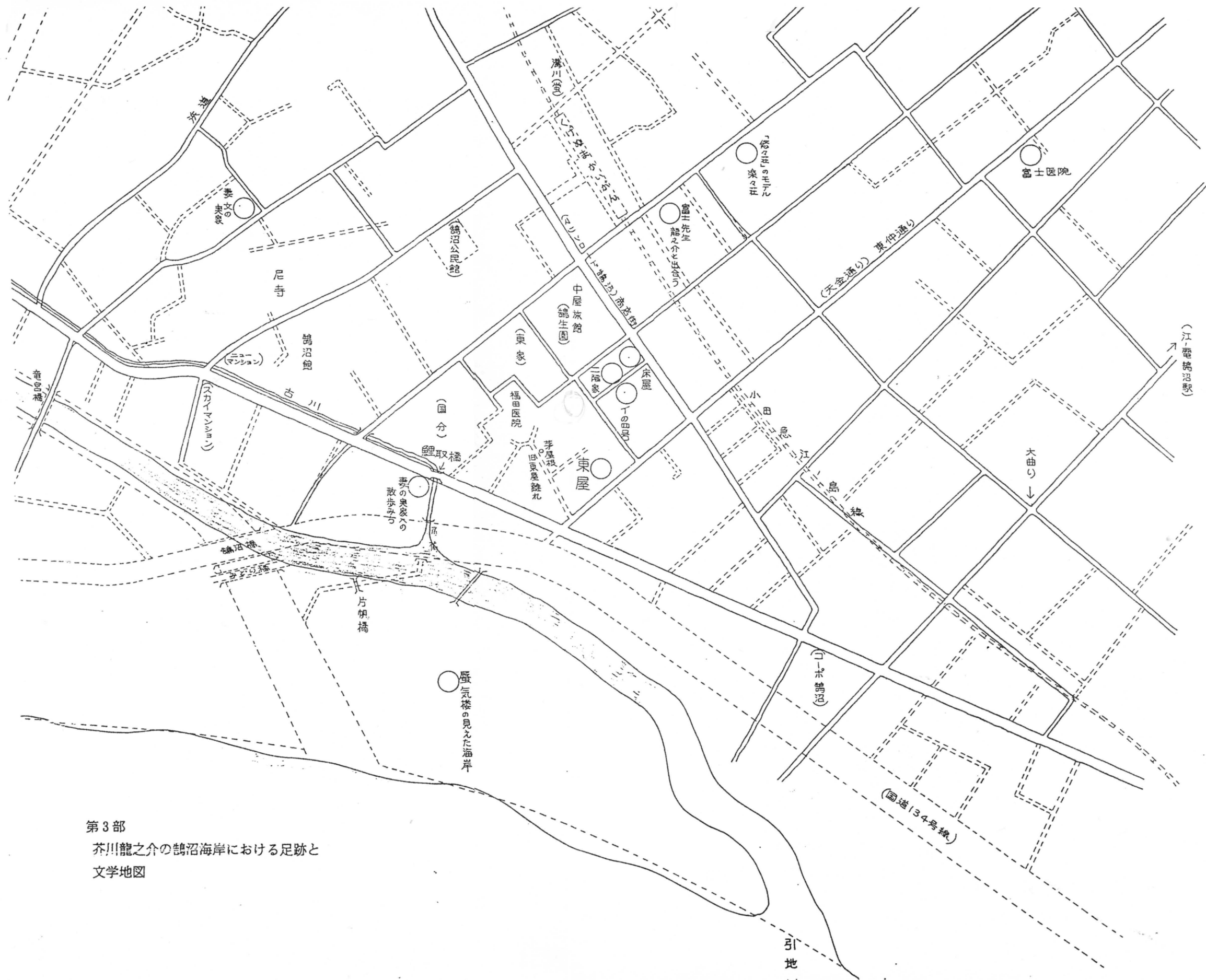


小説、昭和二年三月発行の「婦人公論」に発表。
 「読のない小説」の見事な実例と言われている。
 さりげなくちりばめられている様々な素材が短い作品の中でう
 まく作用している。 平凡な事象や風景を描きながら、
 そのうちよと性質や疑問を感じとっている。
 それは当時の堀之介の異常な神経のためであるけれども、
 読者に一種の実感をともなわせ続ける雰囲気を感じさせて
 いる。
 名作との評価が高い。
 堀之介自身もこの作品に自信を持っていたことが書簡集か
 ら知ることができる。
 「婦人公論のはしりじき書いた、大兄や女姉も登場させ
 ている。」
 「小穴庵二編 昭和2・2・14」
 「婦人公論へ書いた十夜ばかりの小品、或は一読に堪よ
 るなん」
 「宛々木沢書宛 昭和2・2・27」
 「唯、婦人公論の「舞文楼」だけは多少の自信がある」
 （高橋及古宛 昭和2・3・28）
 「舞文楼」は一冊自信をもっている。
 （竜井月宛 昭和2・2・27）
 この作品は講演と時にかかわりが深い、ゆかりの宮城、地
 元が表す。
 堀之介が「舞文楼」の舞台背景として描いた
 舞文楼の舞台背景

舞文楼が鏡泊湖畔で見た、という事実！
 堀之介が鏡泊湖に住んでいた大正十五年の秋、鏡泊湖畔に
 舞文楼が建つことが舞文楼の舞台となっていた。
 新築にともなう、堀之介も舞文楼、作品のシ
 ンに合ったのだ。

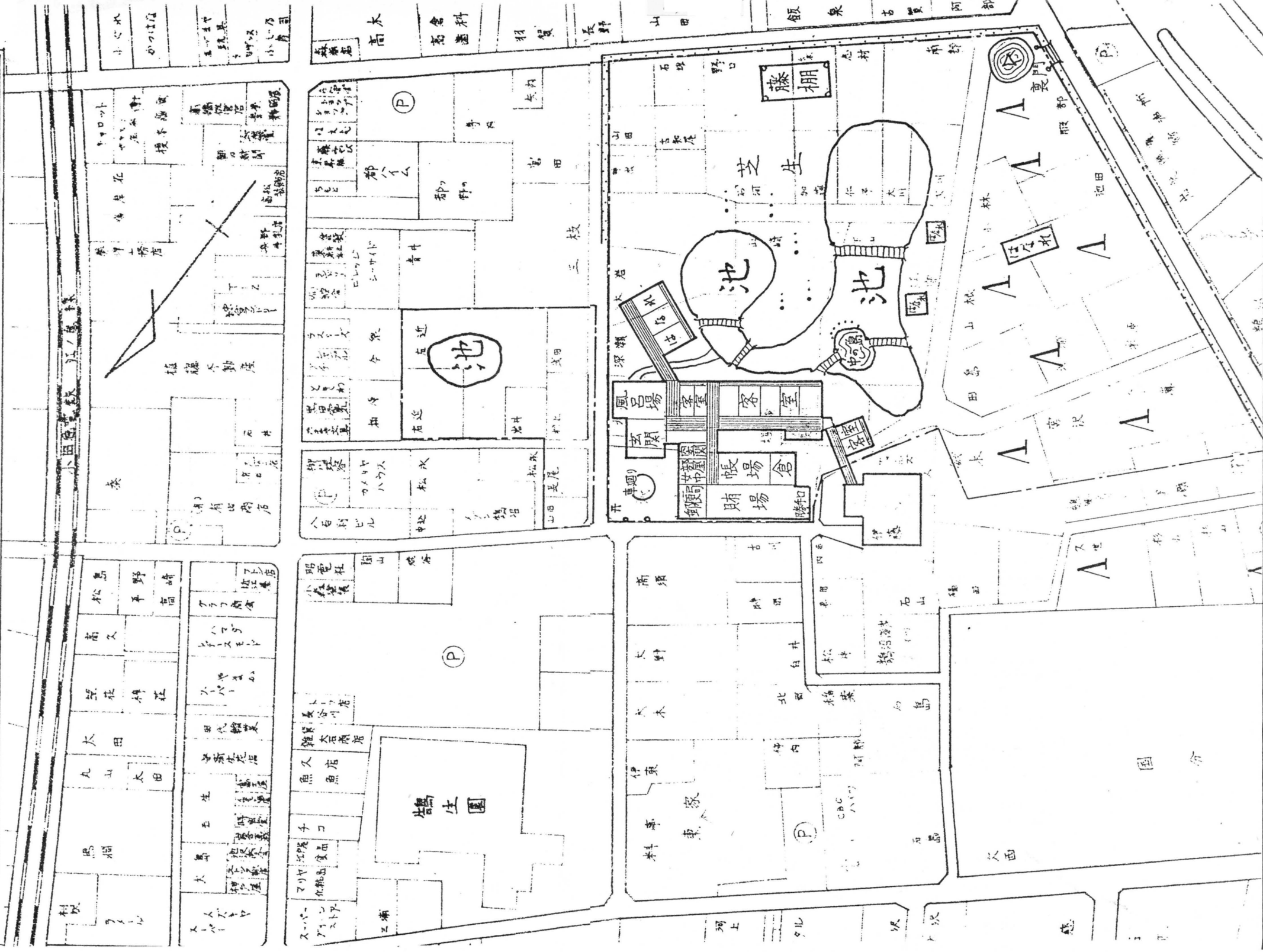
所有者の高木和男さん提供



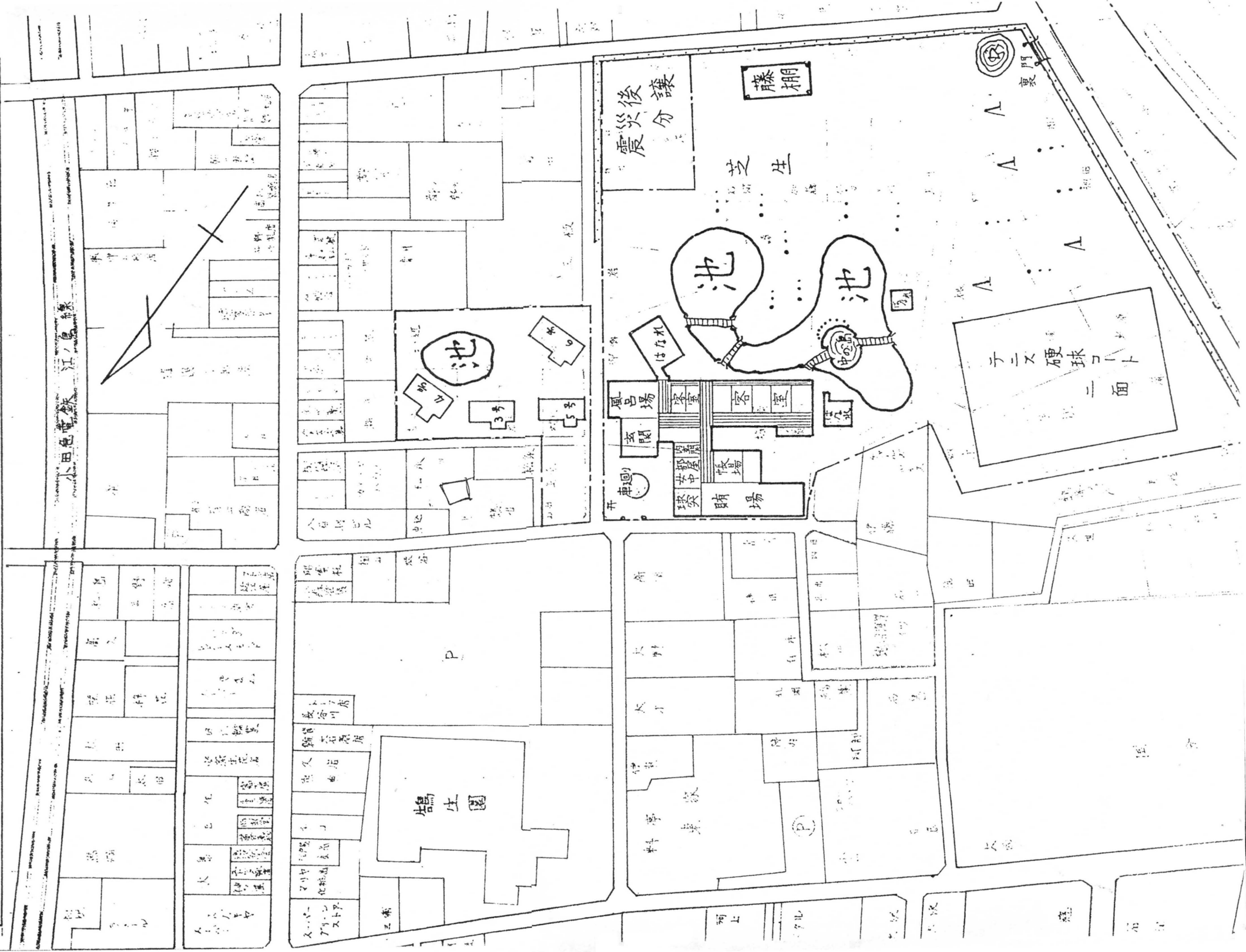


第3部
芥川龍之介の鵠沼海岸における足跡と
文学地図

関東大震災以前の東屋



関東大震災以後の東屋



有 田 裕 一

網元

鵠沼浦（海岸）の網元は明治の末までは、九網（じょう）あったという。そして、大正の末になって七網となった。〔注〕明治の頃は、大東の「東網」が他の九網に匹敵したという。大正では七網となる。その七網とは、

元網（学校網）が本鵠沼 5－1 3

新網が荻田に

高網が海岸 3 丁目に

キス網が荻田に

堀川網が本鵠沼 3 丁目に

大正網が本鵠沼 2－1 5

シンカイ網（堀川網）が本鵠沼 5－1 0 であり、お互いに漁獲を競っていた。

鵠沼の漁業

鵠沼の漁業は、海辺に住んでいる専門の漁師が行うのではなく、農閑期の時に農業収入の足しに行い、「鰯」などを肥料に加工するとか、漁業の利益は等分に分け合うなど共同作業としてあくまで半農半漁であった。海岸から離れた新田（花沢町）あたりからも漁に出掛けていて、今でも新田宮（松が岡 5－7）があり、これが浜道に合流して堀川南部の納屋（なんや）につづいている。納屋とは、海から運びあげた漁具を収納する共同の小屋があった所である。

そして浜道をずっと北にのぼった本鵠沼 2－1 6 の森井さんの所に「寄場」（よりば）があり、ここで捕れた魚の「代分け」（しろわけ）をした。ここで各々が分け前を貰い、焼酎を飲み、大根なますを食べるのが習わしだった。「1 シロ」とは一人前のことで、網主が 4/10 で、残りを皆で等分した。子供は大人の半分で「1/2 シロ」であった。こんな具合なので、現金収入には期待できなかった。

鵠沼の浜は、東は片瀬分であり、西は辻堂分で、東西の浜には、それぞれ網元があったので、せまい浜で網を張るには一度に 3 網が限度で、朝早く競争で網を張ったという。時には他の網のロープを潜らせて自分の網を横切らせることもあった。とくに、鰯網は 2000 疋の沖に張らねばならなかった。また、高網はその後辻堂の人に権利を売ったが、どちら

の浜でも真ん中にかけられず、プールガーデン先の辻堂と鵠沼の境にだけかけられた。

この頃は漁も多く、とくに鰯が大量にとれ、食料の他は浜で拵けて「干鰯・（ほしか）」として肥料に、高級な魚は大八車で横浜方面に売りにいった。大漁の時は「ヨー、ヨー、ヨー」と掛け声をかけ、「ヨコシマ」という長四角の籠に魚を八分目ほど入れたのを天秤棒で担ぎながら村に戻ったものであった。

網元も昭和3年に6網に、5年には5網に、12年には4網に減少し、現在では堀川網だけになり、シーズンには観光用の見物網で多くのお客を集めている。

農業

明治初期、鵠沼村では、有賀密夫先生の調査で、屋敷番号で1番～267番まであり、苗字（姓）も66種のみで、それ以外は明治以後、鵠沼に入ってきた人々と言えるそうである。人家の分布を見ても、「上村」で10軒、「大東」で16軒、「仲東」で15軒という程度で、「宮の前、清水、宿庭、荻田」の辺りが密集しており、「原」は南へと細長く道に沿って点在している。それ以前、鎌倉時代では、満福寺（鵠沼神明）の荒木住職によれば「荻田」は南と呼び、大東・仲東が東のはずれであったという。

この小さな集落が鵠沼の中心であり、皇大神宮を氏神として、九つの村がそれぞれのまとまりをもって、組という組織の中で、行事、作業、講を行い、お互いに助け合い伝統を守ってきた。

鵠沼の農家は、ひとくちに言えば裕福ではなかったのである。特に大きな農家も無く、半農半漁の小作人が多かった。鵠沼の土地は砂地で田圃に向かず、水利争いもよくあったようである。四つの田・・上（かみ）の耕地（神明4丁目）、堀川、奥田、川袋・・以外は畑であった。上の耕地は水が引けず、堀川は引地川から水路を掘り、奥田の田は腹位まで深く、農家でも、米を食べることは稀であった。

畑作をやっている農家は肥料の手当てが大きな問題で、「干か」が買えればいい方で、多くは「人糞」に頼り、横浜方面からも人力で運んで来た。鵠沼海岸も終戦頃まで、農家の人がオケを持ってくみ取りに来たものである。戦前には鵠沼海岸に「こやし組合」があり、野菜と交換していたという話も聞く。そして、肥料を購入する場合は、白旗横町の肥料問屋から借り、収穫した麦等の作物は、向うのいい値でとられ、そのうえ利子まで払った。不作で払えない時は土地を取られた。であるから宿場町の商人は栄え、また反対に鵠沼の農家は、新しい衣料も中々買えない状態だったという。米の飯は減多に食べられず買う時など、引地に豆腐屋があり、（三丁で10銭）これを買うふりして、わざわざその近くの米屋で米を買うとか、子供は学校で弁当の時など人目をはばかって食べねばならなかった。とくに自動車道から北の子供たちは、学校において、成績の面でも先生にあまり歓迎

されなかったという。それは、家に帰れば農業の手伝い、子守り、お使い等家事に追われ夜は疲れて勉強どころではなかった。

明治になると、江の電が開通し、この方面に大きな別荘が建ち始め、農家の人達はそこへ植木職の仕事に出るようになり、小田急が開通すると、海岸辺りにも別荘が増え、出入りの商店も増えて、若い男女は、女中さん、小僧さんとして家計の助けに働きに出たのもこの頃である。また、松が多いこの地域へ燃料のため松葉のくずかきに出、野菜を手車に載せて売りに出たりして両地域の交流が行われたものであった。

鵠沼の作物の名産は、桃、なす、かぼちゃ、早掘りの里芋、さつまいもで、さつまいもは宮の前の小林さんが鵠沼へ初めて持ってきたそうである。これは「相模白」と言って「太白いも」の前で、全部大阪に送った。大阪では、三島産のいもと競ったが、鵠沼のいもは水分が少なく焼くとふくらむので、三島より喜ばれた。藤沢のいも問屋としては、いも啓、いも国、いも平、いも竹（青木豊三郎）があった。いま、鵠沼は四国産のいもを作っている。鵠沼の畑に野菜が普及したのは、大正の始めからで、その頃出来た出荷組合を通して東京横浜方面に出荷した。

以上の内容は、鵠沼本村の次の方々にお聞きしたものである。

八月に関根佐一郎さん、

九月に満福寺の荒木住職夫人、横田さん、渡辺さん、関根久男さんの諸氏である。

以上

村のくらし（その2）

佐藤和子

「鵜沼本村」と呼ばれた地域には、次のような集落がありました。

車田（くるまだ）、上村（かむら）、宮の前、宿庭（しゅくにわ）、清水、蒔田、大東、中東、原、堀川、新田（しんでん）納屋（何や）、石上〔以上「新編相模国風土記稿」による〕

これらの名前は、8月17日の鵜沼皇大神宮（たんに烏森神社）例祭の際の山車に掲げられているので、知っている方も多いのではないのでしょうか。

＊ 車田は明治10年代字再編成の時、藤沢宿へ。

＊ 引地、新田、納屋、石上は現在他の神社の氏子となっているので、山車はもっていません。したがって山車の数は九つ。

これらの集落の中には、いろいろな集団があり、人々の生活と密接なかかわり合いを持っていました。現在とは異なって農業や漁業が生活の中心であった頃は、とても大切な集団でした。その幾つかを挙げてみますと、

◇血縁的集団

本家、分家など・・・屋号にも残っている。ニイヤ、シンヤ、アラヤ、インキョ等。

◇地縁的集団

＊ ジルイ・ジミョウ

一つの土地を分け与えた関係で、その土地が存続する限り、付き合いを続けるというほどの強い関係。ときには本家・分家関係を指すこともあり、血縁関係と重なることもある。

＊ クミ・クミアイ

民俗学上近隣組と呼ばれるもので、各集落ごとに、数戸ずつが組を作っている。相互扶助の性格が強く、冠婚葬祭の際は必ず夫婦揃って手伝いに出た。オショバン、ハナヒキ、火の用心、道普請、墓穴掘り、などクミウチの人たちで手伝った。

集 落 名	組の戸数	組の数	集 落 名	組の戸数	組の数
上 村	4～5 戸	3 組	蒔 田	6～8 戸	5 組

宮ノ 前	5	5	原	3～6	7
清水	3～5	4	掘 川	5～8	4
宿 庭	4～5	3	納 屋	8	1
大 東	3～7	3	新 田	3～6	2
中 東	5～12	2	石 上	4～7	2

◇信仰的集団 (講中・講の仲間として残っている)

＊ 庚申講

農業・除病の神として信仰された。

60日に一度廻ってくる庚申(かのえさる)の夜、庚申堂や当屋(当番の家)に男だけ集まり、青面(しょうめん)金剛像のオヨーゴ(掛軸)を飾りおまいりする。

その夜は酒食(鵜沼では、そばを食べるところが多い)を共にし、「お話講」ともいわれるように、農作業のことや世間話をして語り明かした。

鵜沼には、庚申塔が多く、庚申信仰が盛んだったことがうかがえる。

＊ 地神講

田の神様として信仰された。

毎年春と秋の彼岸に近い(つちのととら)の日に講中の家を順番に廻って行われた。地神様のオヒヨーゴをかけ、線香を立ておまいりした。この日は農作業を休んだ。

＊ 稲荷講

農業の神として信仰された。

二月初午の日に、お稲荷さんに赤飯や油揚げを供え、近所の子供達にもふるまって、講中が共に飲食する。(個人の屋敷内で見かける屋敷稲荷の他に、集落としての稲荷信仰も盛んで講として行われているところもある。)赤飯は以前はワラットに入れて供えたが、今では田もなくなり、ワラットを減ってきた。

＊ 念仏講

庚申講が男性の集まりであるのに対し、念仏講は女性の懇親の場でもあった。

「南無阿弥陀仏」を唱え、十三仏の名号を唱える。大念珠、叩き鉦を使って講を行っている集落もある。

おわり

「鵜沼」第69号
平成6年1月11日発行

青い上っ張り
芥川龍之介と鵜沼海岸
鵜沼村のくらし（その1）
同（その2）

ご注意：本紙（機関紙）の文
章を引用される方は、必ず
出典を明記して下さい。

編集・発行 鵜沼を語る会

鵜沼公民館
電話 33-2001
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34